

---

# きみへ伝えたい言葉がある

日向葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きみへ伝えたい言葉がある

### 【Nコード】

N1666S

### 【作者名】

日向葵

### 【あらすじ】

海外赴任が決まった同期に、複雑な感情をもつ佐伯。応援したいけれど、さびしくないわけじゃない……。彼女の本当の気持ちは、彼に届くのでしょうか？

出会いと別れの春の物語です。

## 前篇

「今まで、ほんとうにお世話になりました。」

パチパチとわきおこる拍手のなかで、「椎谷、がんばってこいよ！」  
「応援してるぞ！」と

次々と掛け声がかかり、輪の中にいる青年は両手に大きな花束を抱え、清々しい笑顔で声援に答えた。

営業二課、椎谷宏太は、今日付でアメリカ支社へ異動となる。

人気の海外支社に28歳という若さで転勤という異例のスピード出世で、

社内全体がお祭りムードだった。

そんなお目出度い日に、泣いているのは私ぐらいだ。

そう滑稽に思いながらも、溢れる涙がとまらなかった。

絶対泣くってわかっていた。

だから、今日はマスクをしてきたんだ。

どれだけ顔を赤くしても、どれだけ鼻水が出ても、誰にもバレちゃいない。

花粉症を言い訳にして、思う存分悲しみにくれる自分に酔うことが出来たから。

だから、気が済むまで思う存分泣き続けた。

椎谷は、同期入社だった。

最初は何十人もいた同期も、月日が経つにつれて、一人減り、二人

減り…

気づけば6年たった今では、椎谷と二人になっていた。

最初の飲み会で意気投合してからは、

仕事の愚痴を言い合ったり、相談をしたり、

この五年間、一緒に励ましあいながら頑張ってきた。

恋人同士ってわけじゃなかったけれど、それなりにお互いを思いやっていたし、

事実、椎谷の歴代の彼女たちよりも、仕事の面では彼のことを知っていたとも思う。

そんな彼が、海外で働くことを夢にみていたことは知っていた。

だから、この話をきいたときは、すごく喜んだし、応援したいと思った。

でも。

それと同時に、胸に走る痛みには気付かない振りをした。

だって、それに気付いたところで、どうすることも出来ないから。

確信してしまったら、傷つくのは自分だから。

## 前篇（後書き）

また「マスク」ネタを使っちゃいました…。  
でも「マスク」って表情読めないし、実際の生活でも結構役だって  
ます（笑）

## 後編

「明日の夜のフライトで、行くことになったよ。」

昨日の送迎会、隣に座った彼が告げた言葉に、私は小さく頷いた。

本日の主役である彼は人気者で、ようやく話せたのは、会もそろそろ終わり頃という時だった。

ちよつとだけ疲れたような表情で、首元のネクタイを緩める。

そんな椎谷を黙って見つめていると、ふと彼がこちらを振り向いた。

「なんか、今日はおとなしくね？」

そう言うと、ふっと気が抜けたように笑った。

「ちよつとは、寂しく思ってくれてたりして。」

「な、なに言ってるのよ！」

慌てて返すと、だよな〜と言いながら、ビールが入ったグラスを口元に運ぶ。

本当はもっと話したいことがあるのに。

格好いい言葉を言って、私という存在を印象付けてやりたいのに。

言いたかった言葉はまるで思い出せず、ただ黙ったまま時が流れる。

結局その日は何も話せず、今日も椎谷は朝から挨拶回りで忙しそうで

話しかける隙もなかった。

これでいいのかもしれない。

今更何を話しかけていいのかも分からないし、希望にあふれる彼を邪魔したくない。

涙で霞む椎谷の姿を視界にいれながら鼻をすすっていると、上司が大声で私を呼んだ。

「佐伯。お前、最後まで同期をちゃんと見送れ！」

その声で皆の視線が私に注目し、椎谷を囲んでいた輪が開け、道が出来あがる。

逃げようにも逃げられず、そっと伏せていた目をあげると、椎谷は苦笑しながらまっすぐ私を見ていた。

周りの人たちは静まり返り、今か今かと私が話したすのを待っている。

仕方がない。

覚悟を決めて、私はマスクをしたまま口を開いた。

「椎谷。念願の海外赴任おめでとう！私は……。」

その後は、言葉がつかなくなった。

いろいろな思い出が走馬灯のように巡り、いろいろな感情が胸を渦巻いた。

一緒に走ってきた6年間、泣いたり、笑ったり、いろいろあったけれど

私は楽しかった。

あなたと一緒にいろいろなことを経験できて嬉しかった。

だから、

だから、一番言いたいことは…。

目を閉じて、しっかりと深呼吸してから、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「私は…大丈夫だよっ！ だから、しっかりと勉強してこいっ！」

そう言った途端、周りがどつと爆笑し、上司も「佐伯らしいな。」と苦笑する。

椎谷もちよっとほっとしたような顔を見せて、笑ってくれた。

心配させたくなくて、安心させたくて、笑顔で送り出してあげたかった。

私は大丈夫。

そして、それは自分に言い聞かせるための呪文。

心の中で繰り返し唱えていれば、きっと一人でも大丈夫。

そう今は信じていたかった。

そうして、椎谷は行ってしまった。

私は心の中がからっぽになったような気がして、涙さえももう出てこなかった。

仕事を終え、夕焼けのプラットホームでぼんやりと電車を待っている時、

風が冷たく吹き付ける。

もう4月だというのに、どうしてこんなに寒いんだろう。

私はスカーフを巻こうと、鞆の中を探しているうちに、別れ際に椎谷から渡された本が目に留まった。

それは、もうずっと前に彼に貸した本で、今日やっと返してくれたものだった。

ブックカバーの端が袋になっているところに、きちんと本の表紙の端がしまわれていて、

それが意外と几帳面な彼らしくて、思わず笑ってしまった。

そして、ふと、その本にしおりが挟んであるのに気がついた。

気になって見てみると、そこには一枚のメッセージカードが入っていた。

「佐伯へ。

今まで本当にありがとう。

佐伯がいたから、今日まで頑張れたんだと思うよ。

本当に感謝してます。

佐伯は強いから、いつも一人でがんばっちゃうけれど、

ためこんだら駄目だよ。

無理しちゃ駄目だよ。

なにひとつ約束はできないけれど、

これだけは言える。

佐伯はひとりじゃない。

俺はずっと味方だから。

きつと会いに行く。

それまで元気で、体には気をつけて！

椎谷 宏太

「椎谷が行っちゃうほうなのに、私を励ましてどうするのよ……。」

枯れ果てたはずの涙が一粒頬をつたう。

少し笑って、少しだけまた泣いた。

不思議。

椎谷には、なんで私の気持ちがあわかつちやうんだらう。

そして、椎名の言葉にどうしてこんなに安心できるんだらう。

フライトまでまだ時間があるはず。

彼に電話をかけよう。

そして、まだ言えてない、本当の、私の一番言いたかった言葉を言うんだ。

震える指で、携帯の通話ボタンを押すと、コールが鳴って、やがて声が聞こえた。

「もしもし。佐伯？」

「あのね、私まだ言っていないことがあるの。」

## 後編（後書き）

春のお話でした。

人に想いを伝えるのは難しいですよね…。

でも言わないと一生分からない。

この二人は、うまくいってくれるといいな（他人事・笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1666s/>

---

きみへ伝えたい言葉がある

2011年4月4日09時57分発行